2019 年 4 月 1 日
研修幹事　山本秀也

拓殖国際フォーラム（TIF）2018 年度「台湾研修」報告書

【概要】

拓殖国際フォーラム（TIF）は、2018 年度海外研修として、以下の通り台湾を訪れた。ここに研修の概要と成果をとりまとめて記録する。

研修期間：2019 年 2 月 21 日（木）～24 日（日）
研修地点：台湾・台北市、新北市、嘉義市、台南市
参加者（五十音順）：　茅原郁生、久保田るり子、小島眞、廣瀬道男、藤村幸義、藤本耕士、山本秀也、吉田頼且、渡辺利夫＝以上、９名（敬称略）
研修目的：

① 総統選を約 1 年後に控えた情勢を踏まえて台湾の現状と今後の動向を把握する
② 台湾の歴史と日本の関係を理解し、併せて中華民国体制の文化的構成要素を考察する
③ 拓殖大学現地 OB との懇親を通じ、大学の海外ネットワークの活性化を図る

【研修の実施状況】

① 台湾情勢の把握に関して

台湾の政情は、2018 年 11 月実施の統一地方選（所謂「九合一」選挙）で与党民主進歩党（民進党）が大敗したことで、2020 年 1 月投票の蔡英文総統のめざす再選が不安視される状況となった。対立する最大野党中国国民党（国民党）では、中央で朱立倫（前新北市長）、呉敦義（党主席）、王金平（前立法院長）の候補者に向けた動静が注目されてきたが、朱の出馬見送りの一方で、統一地方選で高雄市長に当選した外省系の韓国瑜が急速に支持を広げ総統選への去就に関心が高まり始めた。与野党の混迷を前に、無所属で台北市長を務める柯文哲も出馬の機会を覗う。斯かる情勢の下、本研修では民進党の支持基盤である台湾独立派の羅福全氏（元駐日代表）ら台湾安保協会の関係者、および超党派の立場で政財界に影響力を持つ彭栄次氏（台湾輸送機械公司董事長、馬英九政権当時の亜東関係協会会長）から情勢に関する見解や、台湾政界の水面下の話を聴いた。

ｉ）彭栄次氏へのヒアリング

台北到着後、最初の日程として 2 月 21 日午後 3 時半から午後 5 時すぎまで、福華大飯店（仁愛路三段）で実施した。彭氏は主に李登輝政権成立後の政界事情、ならびに両岸（中台）、日台関係に関する知見と所感を語った。（内容は会員限定で文書配布）

ⅱ）羅福全夫妻との会食（講演と意見交換）

2 月 21 日午後 6 時前から羅氏の招待で福君海悦大飯店（重慶北路一段）内の広東料理店「御珍軒」で約 3 時間実施。羅氏夫妻のほか、鄭祺燿氏（台日文化経済協会名誉会長）、李明俊氏（台湾安保協会副理事長）、林彦宏氏（国防安全研究院助理研究員）が出席した。会食に先立ち、林氏が「台湾-地方選挙民進党の敗北と国際情勢の分析」と題して台湾の内政と外交安保情勢を解説した。林氏の主な論点は以下の通り。

・統一地方選（18 年 11 月）の民進党大敗は国民党の勝利ではなく与党への批判が集中した結果である。民進党を指導する有権者意識が選挙民に高かった

・次期総統選で民進党では蔡英文総統が再選をめざすが、立法院で同党の過半数維持は不可能とみるべきである

・国民党は呉敦義、王金平、朱立倫の出馬をめぐり混乱（プラス韓国瑜の動向）

・無所属の柯文哲が出馬するか否か注目。李登輝氏は柯に期待とも

・米台関係は「台湾旅行法」（18 年 3 月）、「国防権限法」（同年 8 月）の成立で強化。リムパックから中国が排除されるなど関係強化

・日台関係は、福島県など東日本産の農産物輸入がネック。台湾の TPP 加盟は日本が鍵を握る

・両岸（中台）関係は近年にないほどに冷却化している

なお、席上渡辺団長より産経新聞（19 年 1 月 11 日付）正論欄掲載の「日台関係の法的基礎を明示せよ」が資料として配付され、見解が表明された。

② 台湾の歴史と日本の関係/台湾における中華民国体制への考察

ⅰ）中正紀念堂見学（2 月 22 日午前）

1975 年の蒋介石死去を受けた追悼施設建設の行政院決定に従い、死去 5 年後の 1980 年 4 月に落成。孫文の遺体を埋葬した南京の中山陵に比肩し得る規模であり、中華民国体制が持ち込んだ権威主義政治の象徴とされる。陳水扁政権末期の 2007 年に「正名運動」の一環として「台湾民主紀念館」に一時名称変更されたが、続く馬英九政権で旧名に戻り現在に至っている。本館 1 階の蒋介石の事績に関する展示施設を主に視察した。

ⅱ）国家人権博物館・白色テロ景美紀念園区の視察（2 月 22 日午前）

台北郊外の新北市新店区復興路にあった戒厳令当時の政治犯拘置所と軍事法廷（1967 年の供用開始から 87 年の戒厳令解除をはさみ 91 年に閉鎖）が、2018 年 3 月から博物館として一般公開された。まだ日本からの訪問も多くなく今回の研修でコアとなる訪問先として設定した。現地では、1950 年代の白色テロ初期に緑島（東部沖の孤島に置かれた政治犯収容所。現在は景美と同じく国家人権博物館の施設として公開）への長期収容を経験した蔡焜霖氏による日本語での解説を聞き、約 30 年前まで台湾を支配した権威主義の在り様を理解することができた。

ⅲ）二二八紀念館見学（2 月 22 日午後）

総統府前の二二八和平公園にあり、1947 年の二二八事件の資料を収集、展示する施

設。（二二八事件は闇タバコの摘発にあたった国民党政権の専売局員の横暴を発端とする台湾人の全島蜂起と、続く国民党軍による報復的な虐殺。正確な被害者数は現在も不明。紀念館は日本統治時代の台北放送局であり、ラジオ放送施設だったことで事件にもかかわった)。視察は午前の人権博物館とともに、台湾人が戦後国民党政権の権威支配の下で受けた重圧の歴史を考える目的で設定した。長く台湾社会を分断してきた「省籍矛盾」（台湾出身の「本省人」と中国大陸から移った「外省人」の確執）を抜き難くしてしまった二二八事件、およびその後の戒厳令下の白色テロについて知見を得ることは、台湾について考える上で不可欠であり、前日の台湾識者へのヒアリングと重ねることで立体的な台湾像が浮かぶことになった。

ⅳ）烏山頭ダムなど嘉義、台南視察（2 月 23 日終日）

日本の台湾統治について理解を深める目的で、八田與一（1886～1942 年）が建設を指揮した嘉義郊外の烏山頭ダムを視察した。嘉義市内では日本時代の営林技官宿舎（商業施設に改装)、さらに台南では旧ハヤシ百貨店を見学した。台南では、オランダ東インド会社の拠点だった赤崁樓、オランダを駆逐した国姓爺（→近松門左衛門の浄瑠璃作品名は『国性爺合戦』）こと鄭成功を祭った延平郡王祠など台湾開拓史の早期史跡、さらに国民党台南支部横に建てられた台湾慰安婦像も実地に視察した。

ⅴ）國立故宮博物院見学（2 月 24 日午前）

研修の実質的な最終日程として、「世界三大博物館」に数えられる國立故宮博物院を見学した。故宮文物は北京の紫禁城に保存されていた清朝までの帝室収蔵品のうち、満州事変の戦禍を危惧して南方から内陸に避難した逸品が国共内戦を逃れて台湾に輸送されたものであり、中華民国体制の文化的な支柱でもある中華文明の象徴とも捉えられる。最も人気のある常設収蔵品「肉形石」「翠玉白菜」は外部施設に貸し出し中であったが、汪兆銘から昭和天皇に贈られ、戦後返還された「碧玉屏風」などを含めすぐれた美術品を鑑賞し、かつ中国、日中・日台の歴史について考える機会となった。

③ 拓殖大学現地 OB との懇談（2 月 22 日午後 6 時半より宿舎の六福客桟最上階で）

TIF のベースとなる拓殖大学の海外ネットワークを強化する目的で、渡辺顧問らの訪台に併せて現地 OB との会食を設営した。OB との連絡には、秘書室石崎理恵氏に当たって頂き、円滑な実施に至った。会食はきわめて和やかな雰囲気の下、OB の方々の愛校心を喚起し、大学の貴重な無形資産である海外ネットワークの価値を高めた。

参加 OB の方々は以下の通り。

・台湾連合会会長　張 進港氏
・北区会長　劉 信誠氏
・北区理事　清水 旭氏
・連合会総幹事　林　忠心氏

・連合会副総幹事　吳 旻叡氏

【総括】

拓殖大学を活動のベースとする拓殖国際フォーラムにとり、大学の出発点に深くかかわる台湾を訪ね、歴史への認識を深めるとともに、将来を見すえた知見を新たにすることは、大いに意義のある目的であった。４日間という日程上の制約に加え、本務の多忙を抱えたとはいえ幹事（山本）の力不足のため、研修を終えてこの意義ある目的が十分に達せられたかはなお心許ないところではあるが、渡辺顧問をはじめ研修に参加された各位の見識、そして運営への積極的な協力の下、概ね所期の日程を事故もなく終えることができた。とりわけ、煩雑な会計業務を引き受けて頂き、旅行代理店との折衝などで適切な指導を頂戴した藤村理事に感謝申し上げたい。

台湾の歴史や社会構成は多様かつ複雑であり、他の国・地域以上に、台湾の全体像を短い言葉で説明することは困難である。その将来についても、理想は様々に描き得るものの、今後の展開が理想や期待に沿うものとは限らない場合もあろう。それでも、台湾が日本にとりきわめて重要であることに些かの変わりもない。台湾に関して的確な情勢判断を下すため、冷静な見方と広い視野、なにより冷めることのない熱意をもってこの隣人に向き合うことを研修の成果として心に留めて頂ければ、幹事として望外の喜びである。

【補遺（4 月 1 日現在)】

2020 年の台湾総統選を巡っては、民進党から前行政院長の賴清徳が出馬表明したことで、民進党内の候補者選定に関心が高まった。順調に行けば４月 18 日ごろまでに同党候補者が固まる。国民党では高雄市長の韓国瑜が「４年間市政に専念」との意向をもらすものの、なお去就をめぐる関心が高い。